

# 常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 4年11月11日(金)

その3 通算 277号

## ◇ 4・5年生の「山の学習」にて



火起こし



炊飯活動



現地で班決め・スタンプ考案



薪割り



落ち葉スキー



散策・吊り橋渡り



キャンプファイヤー

山の学習を締めくくる「おわりの会」が終わった瞬間、指揮を執った青木先生の目には止まらぬ涙。この涙が【4・5年生合同による山の学習】の大成功を物語る。心配していた初企画「現地班分け➡スタンプ考案&練習➡実施」の成功、自身初エールマスター&単独火舞の完遂、無事故&けが人無しの事実、伊藤かをり・樹神両先生の陰なる支えに対する感謝。自分の中でふたをしていた様々な要素が、「終わりの会」での5年生RAI君の成長を象徴する立派な態度と言葉で一気に込み上げたのもよく分かる。子供も教師も「大収穫の山の学習」であった。



## <「落ち葉スキー」のはなし ①自分>

自分は、どちらかと言えはいかつい風体で「こわいものなし」のように見られることが多いのだが、自分が自分を評するなら、反対の「小心者」の方である。

俗に言う「スリルを味わうもの」は決して得意とは言えない。だから『「落ち葉スキー」できることならやりたくないなあ…』という子の気持ちも、分からないではない。けれども、一旦乗り越えると、気持ちのもち方や事象のとらえ方が大きく変わることも心得ている。



## <「落ち葉スキー」のはなし ②児童>

本校の「落ち葉スキー」は待ち時間なし。けれどもリフトがあるわけでもなく、「行きはよいよい、帰りは…」で、滑り終わった後の登りは大変。それでも、二桁数滑走する強者もちらほら。

その中で表情のさえない児童を見つけ、心中を察する。『できることならやりたくないなあ』。

児童に声を掛けて反応を窺う。完全拒否ではなさそう。最後の踏ん切りがつかないだけだ。

ここが勝負所。声は掛けて背中を押すが、最後に決めるのは児童自身だ。すると状況を察した伊藤かをり先生がさらりと加わる。「やってみようか」かをり先生のこの一言が、前に進む一步を決断させた。この時には、表情は一変。プラスの決断は人を強くし、成長を促す。児童にとっての「壁の乗り越え」は、落ち葉スキーを滑り切ることではなく、この「決断の時」なのだ。自身で壁を乗り越えた。



そして転倒なしの見事な滑走。滑走後の晴れやかで爽やかな笑顔が、児童の達成感を物語る。

それでもやはり怖かったのだろう、連続滑走までは足が向かず、座って友達の様子を見守る。



けれども、これで終わらない。

活動終了の時刻が迫った時、児童はもう一度、そして自ら動く。驚くべきは、怖さで二の足を踏んでいた友達を『一緒にやろうよ』と誘うおまけ付きだ。

自分の力で壁を乗り越えた自信。目に見えない大きな成長が、確かにあった。